

柔軟な教育システムに係る懇談会（第3回）の概要について

1 日 時 平成18年9月11日（月）午前9時30分～午前11時40分

2 場 所 ルビノ京都堀川「アムール」の間

3 出席者 委員：8名

東 晴康、伊坂はるみ、稲富哲哉、小寺正一（座長）、
塩見 均、下田敏晴、高畑 哲、田中 守 の各委員

事務局：森永高校改革推進室長 他7名

（傍聴者：7名）

4 内 容

（1）あいさつ 教育庁指導部高校改革推進室長

（2）事務局からの説明

- ・第2回懇談会の概要を委員全員で確認
- ・8/29「子どもいきいきサポート推進プラン」検討会議に報告した内容を確認

（3）意見交換

『全日制課程における柔軟な教育システム』

【着眼点】

一定の達成感を与えられるようなシステムが必要。それをクリアすることで、自信を持って卒業していく。その中で目指すものは、学力の習得、社会性の獲得、個性の伸長である。「ゆとり」が大きなポイント、やり直しのきく、弾力性のあるシステムというイメージ。

【単位制】

学年制は、原級留置をきっかけに不登校になったり、中途退学となるケースがある。単位制は、個々の単位を積み重ねて卒業していくもので原級留置がなく、取った単位が累積でき、多様な選択科目が設置できるという利点がある。

【卒業単位】

通常の学校の場合、月曜から金曜まで30コマ、30単位あり、3年間で90単位すべてを取って卒業させるというのが一般的だが、文部科学省の定める卒業単位は74単位となっており、これをベースに検討するのが良い。在籍可能期間も議論すべき。履修条件で欠席時数が1/3を超える場合、単位認定の対象外となるが、これを維持することは意味がある。

【時間割、日課】

1日5時間の授業が5日間で25コマ、3年間で75単位ということを基盤にしながら、例えば、1～7時間目まで枠を設け、2～6時間目までは必ず履修す

ることとし、1・7 時間目は「ゆとり」の時間として活用できる。1 時間目を学力補充の時間として中学校時代学習できていない部分を解決する時間、7 時間目は発展的な内容を行う時間として活用するなど。

【社会的自立へのプログラム】

社会性を身に付けさせるには、生徒に自信と展望を与えることが大事。例えば、社会的な体験として、ボランティア活動・地域の活動への参加など工夫し、社会への準備として、キャリア教育、高大連携、様々な資格を取得させる。社会へ目を向けさせるため、講演会や文化・芸術鑑賞、スポーツ見学等も有効。教科としては、実技教科（体育、家庭、芸術等）が重要。体験面では、フィールドワークやプレゼンテーションなどを取り入れる。また、自主的な活動として、サークル的なものを準備する。

不登校の生徒は目標を持たずにさまよっている状態だと思うので、社会人講師や職人など数多くの人と出会う機会を設け、話を聞かせることにより心を開き、何かプラスに働くのではないか。茶道等の体験学習も有効。

【単位認定】

学校が定めた教育課程に基づく単位修得、それに基づく卒業認定が基本となる。自分で取得した資格を単位として認めることは、学校で集団生活を営めたかどうかという点で疑問だが、学校の教育課程の中で資格取得を目指す科目を設置すればよい。高卒程度認定試験について、個人が外で受けてきた成果を学校の中に持ち込んで単位認定するのはなじまない。2 学期制で、前・後期に分けての修得などは検討していくべき。通信制との併修も考えられる。

【集団規模】

生徒は不安を持って入学してくるため、安心して学習するには集団規模が大きい方がよいのではないかと。お互い顔見知りになるくらいの集団規模が良い。

【サポート体制】

教科指導が重要なウエイトを占めており、個別指導体制を確保し、単位制を考えるならガイダンス機能の充実も必要。スクールカウンセラーの複数配置、精神科医との連携、養護学校との連携も考えられる。大きなファクターは教員であり、不登校などに対する共感、理解などが求められる。

20 名程度の学級規模で複数担任制にし、学生の学習ボランティアをつけ、勉強だけでなく自分のモデルとなるような存在になれば良い。

【入学者選抜】

長期欠席者に対する選抜が検討のベースになるのではないかと。学力検査で国・数・英の3教科と面接・作文は必要。受験資格については、何らかの設定し軽度発達障害まで含めるかどうか。普通高校からの転入についても弾力的に受け入れ、現役生に限る必要はないのでは。校舎の在り方についても検討し、安心感の持てる空間を用意するなどクールダウンスペースを設けるべき。

【対象とする生徒】

色々な原因をもって不登校となる生徒がいる中で、すべてに対応できる学校をつくることは難しい。定時制、通信制でカバーできる部分もある。一般選抜で入学した生徒と一緒に集団生活する方がよいのか、同じような状況の生徒ばかりで学校生活を送る方がよいのか。単位さえ取ればよいのではなく、学校の中で集団生活を営み社会性を身につけさせることが大事。

すべての生徒を対象にすることはできないので、ある程度限定した枠が必要。集団教育に入れることで復活・再生できるのは、一定の学力があり再チャレンジしたいという生徒。引きこもりの子どもも含めるとプレスクールのようなものが必要となる。中学校をほとんど全欠の子どもは、対人関係のスキルも落ちているし、学力的にもかなりしんどい。

理想を言えば、ハンディを持った生徒をできるだけ受け入れることが良いが、制約があるのも事実であり、どのようなシステムを構築できるかによって、受け入れる生徒も決まってくる。入学後、高校生活に堪えうる、登校できるという見通しを持てることが1つの基準になるのではないか。高校がすべてではないし、全日制以外の多様な制度もある。

定通に進む子、プレスクールに進む子、長欠特別選抜で進む子、全く新しい全日制のシステムでというように、試行錯誤してみて分かる部分があると思う。すべての生徒を受け入れるということは難しいが、実施して検証していけば良い。

【課程について】

現在の全日制のカリキュラム等ががちりしているため、中学校時代不登校であった生徒が進学しにくい状況になっている。全日制課程に柔軟な教育システムを作ることで、本来定時制、通信制があわない生徒にも対応できる。

今回の柔軟な教育システムの根幹は、不登校で現在の選抜制度では全日制にいけない生徒をどうするかであり、社会的自立を図りながら進路希望の実現を図ることだ。全日制高校のシステムの中で意欲、能力をもちながら不登校傾向の結果、学力がついてない生徒を受け入れ卒業させていく制度として検討していくべき。

【その他】

学校現場に一部任せ、プログラムを考えていく部分を残しておくべきだと思う。

各学校にシステムを取り入れるより、新たなシステムの学校を作る方が良い。

中学校卒業の生徒のほとんどが高校の進学を考えているが受け皿が100%あるわけではなく、経済的な理由もあり公立の志望が増えているのが実態である。

スクールカウンセラーは、学校の教員と違う視点で客観的な判断ができる。現行の学校の中でもできることがあるし、教員も教科指導だけではなく、もっと柔軟に対応できるよう意識改革が必要だ。

『定時制課程の一層の柔軟化』

定時制で大学進学を目指すコースと、就職に向けた自立コースを設定できれば教員の負担もかなり違う。中学校に全然出席していない子は英語についてみれば、A B Cからわからない。学習の補助とともに社会的なトレーニング、S S Tを含んだ部分等のプログラムを作って効率的にしていけないと難しい。

少人数の講座が展開され、生徒に対して声かけができています。このことは不登校の生徒にとってはありがたい。通信制では、「がんばれ」という声かけが更なる負担を感じさせ、引きこもったというケースもある。

社会的自立、言葉を変えるなら「社会参画」ができることを目指すことは重要。今何でも大学に行くのが一番だという状況の中で、社会参画を目指す学校は大事。高校を卒業してきちんと社会にでて就職できるということになると思う。

中学校時代不登校で、自分のペースにあった定時制で4年間頑張って自分の進路を見つけていくという生徒がいる。全日制が駄目だから定時制ではなく、最初から自分にあった定時制を目指す生徒は、郡部にはたくさんいる。

『通信制課程の一層の柔軟化』

朱雀高校は、定通が同じ校舎にあるため、月曜日、水曜日のスクーリングが重なり、併修が難しいと感じている。

私立の通信制は授業料が高い中、公立の通信制高校はとても大事。南部にもう1校あっても良い。通信制は全日制よりも大変な生徒が対象であるので、より手厚くしないとこぼれやすい状況がある。

柔軟にすることで、本来の定時制・通信制の果たすべき使命が崩れ、レベルが低下してはいけない。全体で言えば、柔軟な教育システムがつくられ、全・定・通を選んで学習できる形が望ましい。

『まとめ』

全日制をどのようにしていくかアイデアが出せたと思う。多様なレベルで高校にいきたいという意欲を持っている層が存在するので、できるだけ理想的なものをつくっていくべき。意欲を持って入学して見通しが持てること、社会的自立に向けて見通しの持てるカリキュラムをつくること、細かいサポート・ケア体制をつくることなどを事務局でまとめてもらって、次回、提示させていただく。